

544

館書圖京	
函八世	門新
架二	部五
號	類

012122-000-8

特41-544

日用礼儀

中山 録朗/編

M14

AAG-0183



途 中 人 禮 と の 仕 様

途 中 に て 人 と 自 さ あ ひ 禮 を な す に は

足 の 甲 揃 へ 兩 手 を 膝

に 蓋 骨 の 上 ま で さ

げ う つ ひ き て 禮 す べ し

通 も の せ ば 之 を

と る べ し

山 僻 地 に は 肩 に 手 拭 き

か け た る ま、疎 忽 に 禮

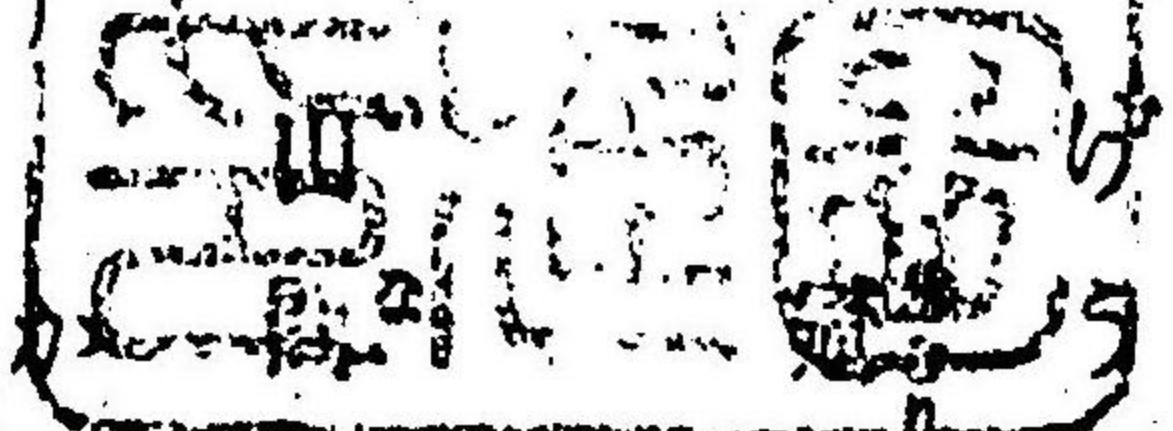
を な す も の あ り 甚 だ 穢 き こと なる べ し



日 用 禮 儀



途^と中^{ちゆう}人^{ひと}と 禮^{らい}の 仕^し様^{さま}



途^と中^{ちゆう}に^て人^{ひと}ど^のも^のさ^きあ^ひ禮^{らい}を^なす^には

足^{あし}の^あ甲^か揃^{ぞろ}へ^り兩^{りゆう}手^てを^膝

に^は蓋^{がい}骨^{こつ}の^う上^{かみ}ま^でさ

つ^ひき^て禮^{らい}す^べし

も^のの^せば^之を

と^るべ^し

僻^{へき}地^ちに^は肩^{かた}に^手拭^{ぬぐ}を

け^たる^ま、疎^そ忽^{とつ}に^禮

を^なす^もの^あり^甚だ^禮さ^こと^なる^べし



日^に用^{よう}禮^{らい}儀^ぎ



座に就て禮する方

大概額とあふは必兩手を出し揃へて疊につけ格別
臂をあげつ禮すべし
或は客と主人と同時に冷
儀否をなすものあ
れども是亦醜き事
なれば主人は客の
語に挨拶すむの
後トぎ述べきなり



扇のふり方

賞人の前にて扇つかえは半分開きむねの間
をすゐしあふぐべし
遠慮なく腋をわけ
なぞしてあふぎた
つるは極心易き
人の前なるべし
若し扇にて物を
参らすることあらは
其本を人の方へ向べきなり



常の茶のたい方

茶を出さば汲し茶碗を茶臺にのせ
 兩手にて臺を髓にもち徐に歩み客より
 凡そ二三尺斗り離れてすはり
 左の手を疊につき
 右の手にて
 出すべし
 未だ禮せざる人ならば
 之を傍らにひき
 禮終るの後とりて出すべし



膳の居のやう

兩手にて膳の兩方をとり
 大指をふちにかへ茶の出
 方と同く徐に歩み暇ぬや
 う氣を附客の左の膳の方
 へ少しすぢかはせ膝へさ
 はらぬ様又遠のかぬ様据
 るなり初め据たる所より四五分
 前にすに靜にひしこむべし



膳 に向 へ て い

膳に向はバ口きかず外見せは箸
をさきにとり飯の蓋をとり
つぎに汁のふた其次に菜の
ふたをとるべし
蓋をとらば中をしらずに
置べからば類なれば汁
をかけ或は汁の残をわけなどして
食ふはひれつなり



常 茶 の 飲 べ や う

茶臺の茶は右の手にて臺どもにとり
すぐと下におは左の手を
た、しく膝の上につけ茶
碗ばかりもちてのむべし
若し相容あらば臺はとら
せ茶碗のみとると心得べ
し
家により茶臺の差支を起さしむることあれ
ばなり



盃さかづき や とり とり ぬり 休やすみ

無む禮れい講こうならむバ蓋ふた
 を盃さかづき洗せんにて能よす
 ぎ滴たをきり臺たいにの
 せまいらすべし
 受うたる人ひとは臺たいを下くだ
 にかき右みぎの手てにて
 蓋さかづきをとり左ひだりの指ゆびを
 いとどこにかけ戴いた
 くべし

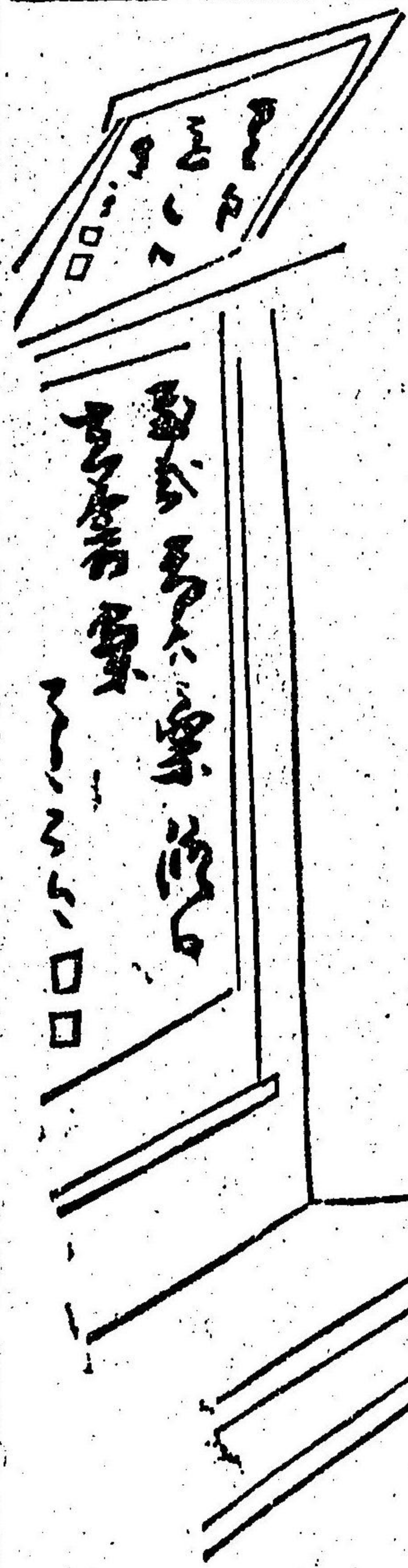


飯いひ 汁じゆ の 通かみ ひ

客きやくの碗わんを盃さかづきにてとり盛もりたらバ
 復また盃さかづきにて差さ出だべし必かならむ巨おほ肆しを
 碗わんのふちにかへべから
 せしるを勝かつ手て方かたにても
 らバ外ほかの蓋かたをなしもち
 いで其そのふたをとりてば
 んのぬきにあき差さ出だすべし



他^ト所^トにて額^{ガク}幅^{ハク}物^{モノ}を見^ミて



家^イの中^{ウチ}にて額^{ガク}面^{メン}或^モは幅^{ハク}物^{モノ}を
立^{タチ}のまゝ見^ミべからば其^{ソノ}贊^{サン}若^カ
くは文^{ブン}を讀^{ヨミ}とも聞^キたる人^{ヒト}も
なきに聲^{コエ}を發^{ハツ}するは物^{モノ}知^チめ
かして悪^{アク}きなり



鼻^{ハナ}を か む 体^{タテ}

人^{ヒト}の前^{マエ}にて鼻^{ハナ}をかむはす
べて下^ゲ坐^ザにむかふべし又^{また}
なるたけ音^ネせざる様^{ヤウ}振^ツむ
こそ注^{チュウ}意^イなり
撮^セみしあとをひら
きみるはいやし隔^{カク}
段^{ダン}貴^キ人^ニの席^{セキ}ならバ
次^{ツギ}の間^マへ立^{タチ}てかむべし



障子のあけ方

貴人の前にて戸障子のあけ
 たちするに立のまゝなるは
 至極失禮なり常といへ
 ども戸障子のあけたち
 はしづかにすべきもの
 なれば貴人の前はわけ
 ても氣をつけべきなり



客を待ふの心得

客を待ふの緊切なるは容儀温和にして丁寧ていねいに敬うやまつひ疲煩めんどう
 らしき顔容をなさせ客をして快樂たのしみましむるにあり
 或は客の來るに倉皇そうそう畏縮おそ縮染しみく話はなもせせ彼處そこ此處ここ驅走かきまは
 り板の間は騒さわしく戸障子の開閉あひそぎ瀬戸物の取扱あつかいも手荒あらくし
 て静謐しずかさるものあるは大おほひに客の心を惱あやませせかつは已お
 れが短慮たんりょを人に笑はし客の顔を見みば襷たすきを脱はし肩かたより手
 拭ぬぐをとり能心のうしんを鎮おさめ面おもてを和やはらげ寒暑せむしすままば先まづ烟草たばこ盆ぼんを
 出し茶ちやを汲くみ圃か圃たを直ただし等隨とら分ぶん失策しつさくなく懇たのろろに遇あふべ
 し
 惣お應おすべき人ひとならば手早てはやく仕度しどをなし儉色けんしきを以もて待まちふ

べし但客の目に掛らざる様仕度し出来上らば烹炙の不
 調法を謝るべし假ひ飲食美味からざるも其待遇の善を
 稱讚らるべし
 器物は質樸にして潔よけれへ奇麗ならざるも可なり別
 段近隣より借る杯は無益なり
 客を招バ已れが家産に應トて馳走すべし不次の馳走は
 馳走にならむ
 一度用ひし管匙を皿井の中に置又は小皿を備えせして
 肴等掌にとり食するは不作法なり
 内政に習ざるものは客死ありて酒を備んとするも下物
 いちく揃はざれば出すべきものにあらむと心得不興を

催ふせしめざることを稀なれば先づ出来合の品にて早く
 坐を保せ復料理せば角別忙しげなく手際に出來上べし
 況してや無人の時右の如くせば客をして欠伸せしめむ
 落付て話も爲し割烹も出來大に取なむよかるべし
 今時は飯酒等強ひて備むるは無禮野俗にして可笑可怪
 事となりたるも尙未だ此風習の改らざる土地ならば獨
 り自分のみ開化体らしく衆人を異るなかれ
 殊に此風の行はる、土地より客の來るあらば氣づかわ
 ざるべからむ客をして空復憂に負はしむ場合により已
 れ又飯酒を客みし杯と思はしめん
 又客に充分食せしめん爲め殊更に食を猶豫するものあ

るは自己の好ざる物料を客の振舞たりやと訝からるべ
 し故に主人は客の遅速に連て食するも亦待の一端なり
 疎忽の人は不圖客の来るより品切に迫り客の見向も憚
 らせ小儀持せて豆腐屋に遣り德利濯ひて酒店に飛せ錢
 音聞も遠慮せぬ隙に立寄叩語する杯我來る故かく面
 到せしむ氣の毒なりと客の意を傷め馳走反りて客の心
 配となる實に客をして快く食せしめんとならば右の如
 き事は客の目に留らざる様注意すべし
 前にも謂る如く客を樂ましむること肝要なれば己れが
 身分を客に誇り面なるは惡し
 稀には人の話を聞入せ己れが話度事のみ彼此と口喧し

く客の倦厭を氣附はざるものあり
 假令美味珍膳を供ふるも客をしく倦厭はしめば何の興
 にかなり難し業發にても客の心を満足せしむる方却て
 優るべし
 才ある人は誇らせ懼れせ其中庸を得て客話あれれば己れ
 黙して之を聽飽迄客に語らしむ客黙して話なきに究屈
 せば己れ語りて客を怡バしめ徒らに客の自負自尊を挫
 ざるなり
 又坐席の様子客の氣趣を見計らひ沈重もし洒落もし戲
 謔もし蠶婦野夫にも馴染べく高上貴賤にも適添なり
 されど人真似杯をなし己れが才智を博せんとするの才

智は疾むべし是人の人真似せば人亦己れが真似せられ
 ん事を恐れ到底我と親善なかるべければなり
 時として招かざる客同道して来り他人数になるとも同
 道したる此客は一層深切にし客の念頭欺ひを生じ速く
 解乞せんとするの心を萌さしむる勿れ
 又兩意傾投の人のみに話談せず相手程よく諸人を氣と
 るべし
 來客話あらば小事にて益なかるべきも意を留て聽ざる
 毋れ假ひ知りたる事にても知らざる做せば客の心意滿
 足せん忘れても愚弄侮慢の言を發し烟管を弄び外見を
 なし猫兒と戯る、杯爲すなかれ但一概に媚びて笑顔を

作し口に任せて唯諾低頭するは昇屈に陥り客亦不快を
 覺ゆるものなれば能適宜を酌量し心の剛きも振舞べし
 爪尖汚れて菓子をとり髪は亂れて面に被さり荒く座り
 て塵を起て襯衣穢れて真氣を發し紙をよりて耳敷を堀
 り又鼻梁をなで足搔など不潔体のみならせ失禮よわた
 るべし
 食よ當るの際涎沫を吐ざる様注意すべし然らざれば客
 をして意外の不淨心を引おこさしむ
 遠方より客來る時は直ぐに客座に通し旅の疲れを慰む
 べし
 料理も只美甘のみを専らとせ必き疲を慰むべく注意

せんことを要す
 廁に行も草履の鼻尾きれ手盥はんとするも水なきか若
 きは不都合千萬なり
 夜は旅路の疲れを虞ひせで叶はざる事ならば據なけれ
 ども可成的長話せせ早く寢所に臥さしむべし
 油は惜みなく往復の妨げならざる様燭すべし客起ハ直
 ぐに寢所を片付圍圍を壘み晒すべし
 滯留せば同ト食物にても種々の法を用ひて割割し客を
 悦バしむる内政の秘譯なり
 呉れくも我來る折悪しくかく面倒せしむ氣の毒なりと
 容の意を傷ましむる勿れ又親の代には是々もよく我履

物迄揃ゆれども最早其子はかくくなりと否ましむるは
 子たるもの、疎漏ならせや
 家により兒輩の行儀悪くして笑をとるを妙なからされ
 バ今其二三を掲げんに
 客の禮もせで其前を奔走し物に立寄戸障子を鳴し或は
 執拗て家内を噪がしむ之を姑息計バ傍に戯れ客の烟管
 で火鉢を叩き扇開ひて灰を起領巻とりて鼻涎をつけ外
 に出れば珍しげに容の靴をはきて泥をつけ蝙蝠傘開て
 骨を痛む又父母の留主を狃ひ客を憚る菓子を袂に入
 手に櫻み去
 此等の如き家の笑を取のみならせ皆客をして困らしむ

るものなれば父母たるもの平生戒め置べきの一道なり

客の心得

總て人は傲驕らき窮屈ならき謙遜を旨とするものは傍らより見ると見よかるべし故に客に行ハ此意を心に銘ト泰悠にして禮を尊卑に失は老人の笑貝とならざる様心掛るこそ專一なり折令を察せき遠慮なく長話をなと家人を聞へしむるは終に嫌悪る、の媒ならん大切にせられんには展々行べから老履もけハ蒼蠅る、の基ひなり

口上は朗らかに鄙語俚言を用ひ老世話しげなく順を亂さ老人により解り易き様のふべし祝儀を賀するも死を吊ふも同容類なるは我心情の薄なるべし手に物なきとて火鉢の灰を攪撥し手を拱胸を撫で股間に挟み高聲に欠し軀を蠢動し物を注視誰も問ざるに我身の上を語り口涎を流す等人の笑癖となる濫觴なり急がせともよき事ならば談話闊なるに會釋もなく長舌こみ人の話を妨げ又話し掛し話盡ざるに中途他の話をはトめ聞ものをして味なからしむるなかれ茶を汲バ互壁にて急須の蓋を押へ失損トなき様心掛戸

障子を開閉せば後を顧み間隙のなき様注意すべし
 壁を隔て尙聴べき程の高笑をなすは野興慣はせなり
 他人を可否し又は朋友を嘲り或は尋るものなきに
 我とは縁令なり某日は某家に招かれ馳走せられたり
 杯都て自滿らしき言は長者の尤も嫌ふ所なり
 似非者の人は英國の語を耳學み席の區ちなく辨ト立名
 を釣らんとし懷時器のあるを自滿げに餘をねト屢々時
 を飲ふる杯是亦長者の好まざる所なり
 衆くの客と座に就バ首好座席美味肉等自由勝手になる
 べきも他人に譲り食りよ食する勿れ又左右と耳語を戒
 むべし

羹を吸れば椀は面を掩ひ箸を扱へバ器返りて肉を飛し
 魚骨を折んと顔を赤め汁を嘗んと指を口にし肴啣へて
 皿を返し返せし肴復啣へ復返す杯は至極不作法なり
 其他口に入んとして先喫なとは毒物を供たりやと主人
 を疑ふに當る甚だ不禮なり
 凡て飲食は緩からざれば健康に害あるのみなら老性の
 輕忽を表し甚だ見苦しきものなれど客に招かるの際
 餘り緩かなるは其調味の口に適はざるを疑るべし若嗜
 まざるものあらバ少しも手を觸べから老假初にも鼻を
 附て嗅或は箸にてくりかゝるすなすなすなすなすなすな
 客に招かれ角別置烹なきとも甘美を漁るが如く左顧右

視べからせ
 舞技三味なを少しは客に連べき場合に際しなば己を得
 ざる事なれ必は目自の容貌ある勿れ
 世間には他人の奏てるを見兎角に頭を振り皿を叩き足
 指を鼓し調子を合するものあれは下等社會の所為
 なれば慎ませしめて可ならんや
 時として老人と同座せば止を得ざる事故ならせバ己れ
 前に座を去勿れ
 相伴客に招れば遅く行せ又正客の如く物をほめを歸る
 も亦後なるべし
 尙主客の爲め一言述べきあり所謂食合の惡き是なり世

人の能知る如く蕎麥と田螺の食合以て証すべし實に測
 られざる大害を生むるものなれば客となり主人となる
 もの宜しく省察を加へ預て老練の人に就質し置べきな
 り
 右の一篇簡短にして未だ其意を悉すに足せど雖も古今
 彼此の書中に就尤も日用接近にして解し易きの要件を
 摘み問余が平生の實験を加へ専ら竹馬脚の輩をして
 交際其法を得失饒陋態に陥るなからしめんと欲するの
 み故に其語卑劣にして大方の譏を招く必ずべし
 其圖を掲ぐるものは泰西所謂兒童は眼目を以て智識の
 門戸となすの意にとるなり看者焉を諒せ

明治十四年二月十九日御届
二月廿八日出版

(定價金三錢五厘)

山梨縣西山梨郡櫻町三丁目
三十六番地平民

編輯兼出版人

中山 錄 朗

